

## II. 牛頸須恵器窯跡の発見

### 九州大学の調査

九州大学には、牛頸須恵器窯跡で採集された遺物が20点余り所蔵されています。これらは、中山平次郎博士や鏡山猛教授が大正時代から昭和初期にかけて採集されたものです。採集された須恵器を見ると、釉着したものや焼けひずんだものが含まれており、窯跡周辺で採集されたことが推測されます。遺物の年代は、奈良時代のものがほとんどです。今では、これらの資料がどこで採集されたのか特定できませんが、牛頸須恵器窯跡の研究史上、極めて貴重な遺物群です。



中山平次郎 博士（九州大学所蔵）



鏡山猛 九州大学名誉教授（九州大学所蔵）



九州大学所蔵牛頸須恵器窯跡採集須恵器

### 昭和3年の調査

昭和3年3月29日、九州日報（現在の西日本新聞の前身）に筑紫郡牛頸で須恵器窯跡が発見されたことを報じる記事が掲載されました。記事は、福岡県調査委員島田寅次郎氏が牛頸区長山上高太郎氏の案内により牛頸城ノ山で発見された窯跡の調査を行い、規模と形状について詳細に報じています。記事によれば、「窯は底が埋まって居るから正確な測量は出来難いが、間口の幅、上部で三尺二寸五分（98.4cm）、中央部で三尺六寸（109cm）あり、窯中の最も広い所は六尺二寸（187.8cm）に達する、而して間口から奥へ一尺四寸勾配を有し九尺五寸（287.8cm）の所へ至りて三個の煙突が上に向って穿たれて居る、而して中央の煙突の直径一尺八寸五分（56cm）、左方は一尺七寸五分（53cm）、右方一尺五寸五分（46.9cm）で高さは約八尺七寸（263.6cm）に達して居る」（一尺＝30.3cm）とあり、煙突が3個ある牛頸須恵器窯跡特有の多孔式煙道窯であったことが分かります。

その後、調査が進められ、4月10日の記事によれば、窯の中から「甕の破片が九十ヶ」出土したと報じられています。なお、この窯を発見したのは牛頸在住の人で、「少年時代嘗て1度見た事があつたといふのであるが、最近二十萬圓を洞窟内で発掘した夢を見、夫れが子供の時に見た城の山の洞窟」であったため探し当て、掘り出したそうです。

この調査の記録は昭和14年の『史蹟名勝天然記念物調査報告書第13輯』で島田氏により報告され、学会に牛頸須恵器窯跡の存在を初めて知らせました。また、山上高太郎氏は牛頸に残る須恵器窯跡の歴史的重要性を認識し、さらに大野城跡・御笠の森の保護にも努めるなど、郷土の文化財保護に取り組んでいます。

この窯跡は現在でも平野神社南側の城ノ山に残っています。山の尾根から少し下った所に窯体の一部が見え、窯内には3個の煙突が今でも残っています。



城ノ山の全景（中央の山）と牛頸公民館（右手前）



山上高太郎氏と牛頸城ノ山窯跡

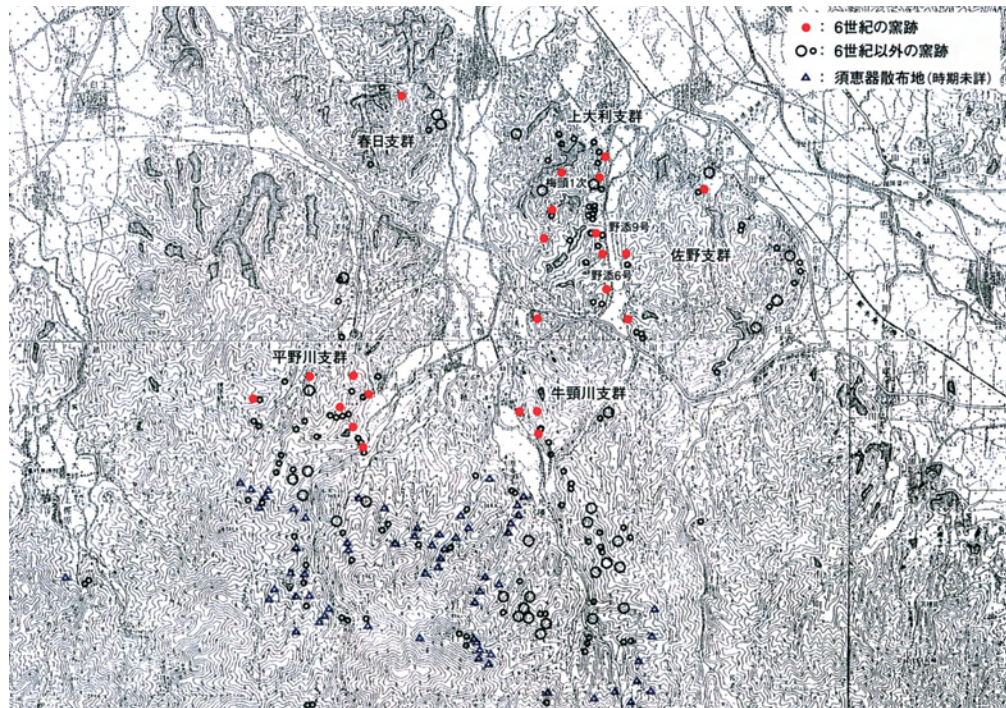
### Ⅲ. 牛頸須恵器窯跡の開窯と変遷

#### 操業のはじまりと多孔式煙道窯（6世紀）

牛頸須恵器窯跡の操業は6世紀中頃に始まります。上大和支群の野添6号窯跡などがこの時期にあたり、平野部に近い丘陵の入口に窯が作られます。後半になると、次第に窯は谷奥へ入り込んでいきます。一方で、新たに春日支群で操業を行う群が現れます。さらに6世紀末頃になると、窯の数は一気に増加し、牛頸支群や佐野支群にも新たな窯場が現れ、後に牛頸須恵器窯跡と呼ばれる地区全体に窯が展開し、以後広い範囲で操業が行われます。

この時期はつまみがなく底の丸い蓋杯（杯H）のほか、椀・高杯・甕などの小形器種と甕・大甕が焼かれます。6世紀後半段階では、出土総重量に占める甕の割合は7割に及び、甕の製作に力が注がれていました。また、この時期は瓦も焼かれています。日本では最も早い段階で瓦生産を行っており、製品は那珂・比恵遺跡（那津官家推定地）からも出土しています。

窯構造は、6世紀後半の野添9号窯跡は奥壁が絞り込まれる紡錘形になります。しかし、6世紀末になると大きな変化が現れます。多孔式煙道窯の登場です。これは、中通A-2号窯跡のように焚口から窯尻まで幅があまり変わらない短冊形とでも呼ぶべき平面形をとり、最大の特徴は排煙孔が2～6個と複数開けられることです。この多孔式煙道窯が登場する頃、瓦の生産が行われ、韓国の瓦窯に複数の煙道をもつものが存在することから朝鮮半島との関わりを指摘する意見もあります。



6世紀の窯跡分布図



野添9号窯跡



梅頭1次1号窯跡



#### 古墳時代の窯の操業

全長10m以上ある多孔式煙道窯を用い、大形品である甕を含めた焼成がおこなわれる。



6世紀の須恵器